

令和 6 年 6 月 2 5 日現在

機関番号：3 7 1 0 1

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：2 0 K 0 0 4 8 7

研究課題名（和文）H・ヘッセ『少年の日の思い出』完成への変遷と作者の創造的変革から見た作品解釈

研究課題名（英文）Progress toward the completion of Hermann Hesse Memories of Youth and its Interpretation from the perspective of creative transformation of the author

研究代表者

山本 洋一（YAMAMOTO, Yoichi）

九州共立大学・経済学部・教授

研究者番号：9 0 2 6 8 7 8 0

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000 円

研究成果の概要（和文）：『少年の日の思い出』の教育現場での理解の実態調査は、コロナ禍の影響で困難をきたしたが、学習指導案の分析や教員へのインタビューにより、作品理解への多様な工夫と同時に、翻訳文学であることに起因する問題点などを読み解き、研究論文にまとめた。さらに、日本のヘッセ受容の実態を背景とした、同作品の日本人読者へのインパクトとその解釈の可能性について記した共著書の、今年度末英国での刊行も決定している。また、『少年の日の思い出』の原典『クジャクヤママユ』の改作の調査でも、雑誌や新聞のみに掲載されただけの改作を11点発掘し、作者の創造的変革との関連を探るべく、その変遷の詳細な比較検証にも着手している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本の中学校の国語教材として長年読まれてきた『少年の日の思い出』の作品理解の実態を客観化し、場合によってはそこに内在する作品理解の問題点も顕在化させることをひとつの目的としてきたが、いずれの点でも予測に沿った結論を見出すことができた。さら同研究は、同作品の原典『クジャクヤママユ』の諸改作の変遷と作者ヘッセの創造的変革の関連性に依拠した、『少年の日の思い出』の登場人物の性格理解などに関する新たな解釈の可能性にも繋がるものと期待していたが、これも今後の国語の授業構築の一助となりうる、ある程度予想通りの成果が得られたと考えている。

研究成果の概要（英文）：Although it was difficult to conduct a survey on the understanding of "Memories of Youth" in educational settings due to the effects of the coronavirus pandemic, I was able to find various ways to improve the understanding of the work and analyze the problems of its interpretations caused by translated literature through the lesson plans and interviews with teachers. And I summarized them in some research papers. Furthermore, it has been decided that a co-authored book will be published in the UK at the end of 2024, which describes the impact of Hesse on Japanese readers and the possibilities for its interpretation, based on the actual situation of Hesse's reception in Japan. In addition, in a survey of adaptations of "Nachtpfauenauge", the original text of "Memories of Youth", I discovered 11 adaptations. And in order to explore the relationship with the author's creative transformation, I have also begun a detailed comparative examination of its changes.

研究分野：German Literature

キーワード：ヘルマン・ヘッセ 少年の日の思い出 クジャクヤママユ 改作 国語教科書 受容 新解釈 Global Impact

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ヘルマン・ヘッセの短編『少年の日の思い出』は、1947年の文部省著作教科書に初めて登場して以降、現在に至るまで70年以上にわたってほぼ毎年しかも複数の教科書に掲載され、多くの日本人にヘッセ作品に触れる機会を提供し続けており、検定教科書を使用する日本中の中学1年生の大多数にとって、ヘッセ作品との出会いの場を提供している。それゆえ、国語教育関係者の間では『少年の日の思い出』への注目度は非常に高く、現場教員による学習指導案や、授業内容構築をテーマとした研究会、また当該問題に焦点を当てた教育学研究者による学術論文などが多数存在し、その多様な言説にはヘッセ研究者にとっても示唆的な内容が数多く含まれる。こうした状況下にあつて、ドイツ文学研究者も同作品に注目してしかるべきところであるが、ドイツ文学研究領域では同作品を対象とした研究はこれまでほとんどなされていないのが現状であった。

ところで、学校教育の現場における同作品の理解の方向性のなかには、一部、例えば「道徳心」や「正義や責任」を醸成するための素材として読み解こうとするものもあり、純粋なヘッセ作品解釈の観点からはある種の違和感も禁じ得ない状況もある。同時に、現場教員の学習指導案などには、「読みの広がりの可能性」を求めながら、従前からの「読みの枠組み」を越えられないジレンマも散見される。

そうした意味においても、教育現場での従来の「作品理解」とは異なる視点からの、新たな作品解釈の可能性へのアプローチの必要性も求められるのではないかと考えが、当研究の重要な動機となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヘルマン・ヘッセの1931年の短編『少年の日の思い出』（原題Jugendgedenken）を、その原点としてのDas Nachtpfauenauge（1911）以降に存在する複数の改作の変遷を手がかりに、作者の創作上の変革との関連から分析検証することと、わが国の教育の現場で戦後70年以上にわたって国語教材として採用され続けてきた同作品を、ヘッセの創作上の自己変革のプロセスとの関連で理解することにより、国語教育現場での「読み解き方」とは異なる新たな解釈の可能性を提起することにある。そのために、まずは同作品の複数の改作を発掘した上で、それらをヘッセの作品創造上の苦悩とその解決に向けた試みの変遷との関連のなかに位置づけ、その観点から同作品の解釈を試みようとしている。

さらに具体的に言えば、社会通念や道徳規範に反し、場合によっては「犯罪」と見なされる自己内の潜在的欲求を一旦白日の下にさらし、それらを肯定的に受容することで自らの苦悩を克服する試みを具現化しようとした作家ヘルマン・ヘッセの創作上の自己変革のプロセスは、中期の作品『子どもの心』、『クラインとワーグナー』、『クリングゾルの最後の夏』そして『デーミアン』として結実するが、これらが成立した1918年から1926年までの時期をまたぐように存在するDas Nachtpfauenauge（1911）とJugendgedenken（1931）の異同と、当該変革期とほぼ重なる時期に存在する（と言われてきた）Jugendgedenken以外の改作の変遷を分析することによって、ヘッセの自己変革の流れの意味を補完するとともに、さらには当該分析自体を『少年の日の思い出』の新たな作品解釈へとつなげることが、本研究の主たる目的である。

これまでに先行研究の存在しない、当該の視点からの研究自体が独自性を備え、さらにその研究によって可能になる『少年の日の思い出』を対象とした新たな作品解釈は、国語教育の現場において多くの教員が求めてきた同作品の「新たな読み」の可能性を広げる契機となり得、ドイツ文学と国語教育という異なる分野を生産的につなぐ、創造的成果を生み出す期待が持てる。

3. 研究の方法

中学校の国語教材としての『少年の日の思い出』が、例えば前述のように、「道徳心」、「正義や責任」などを学ばせるための学校教育に都合の良いある種の偏向的理解がなされているとすれば、同作品がヘルマン・ヘッセという外国の作家による純然たる文学であるとの認識から乖離して、主に「学校教育という文脈」の中で「利用されている」可能性があるとするれば、文学作品としての読書体験が希薄になっている可能性が想定されるという意味において、まずは、『少年の日の思い出』の読書体験が、ヘッセの読書体験として認識されているか否かを測る目的で、大学生を被験者とした作品の認知度に関するアンケート調査を実施した。このアンケート調査は、コロナ禍の影響もあり、実施が難しい環境にあったものの、全国の学生約1500人を対象に実施できた。結果の一部は、下記の論文中に言及されている。

次は、『少年の日の思い出』が、実際に中学国語教育現場においてはどのような「読み解き方」がなされているかについて、教員による教材研究、学習指導案などの検証に加えて、現場教員へのインタビューを行い、現状分析をしている。この結果についても、後記の論文中で言及しているところである。ただし、当初希望していた、現場の授業の参観に関しては、やはりコロナ禍の影響により、学校側からの許可が得られず、残念ながら実施できていない。ただし、現場の状況及び生徒の理解に関する問題点等については、教員へのインタビューによって、ある程度情報収集はできた。

最後に本研究にとって最も重要な、『少年の日の思い出』の原点 Das Nachtpfauenauge (1911) から『少年の日の思い出』(原題 Jugendgedenken 1931)に至る改作の変遷とヘッセの自己変革のプロセスとの関連性の検証のために、雑誌や新聞にしか掲載されたことのない改作の発掘調査についてであるが、これもやはりコロナ禍の影響でドイツへの渡航が制限されるなか、実現できずにいたが、当初予定の研究期間を1年延長できたことにより、ようやく遂行できた。結果として、以下のように『少年の日の思い出』以外の改作11点(一部画像添付)を発掘できた。



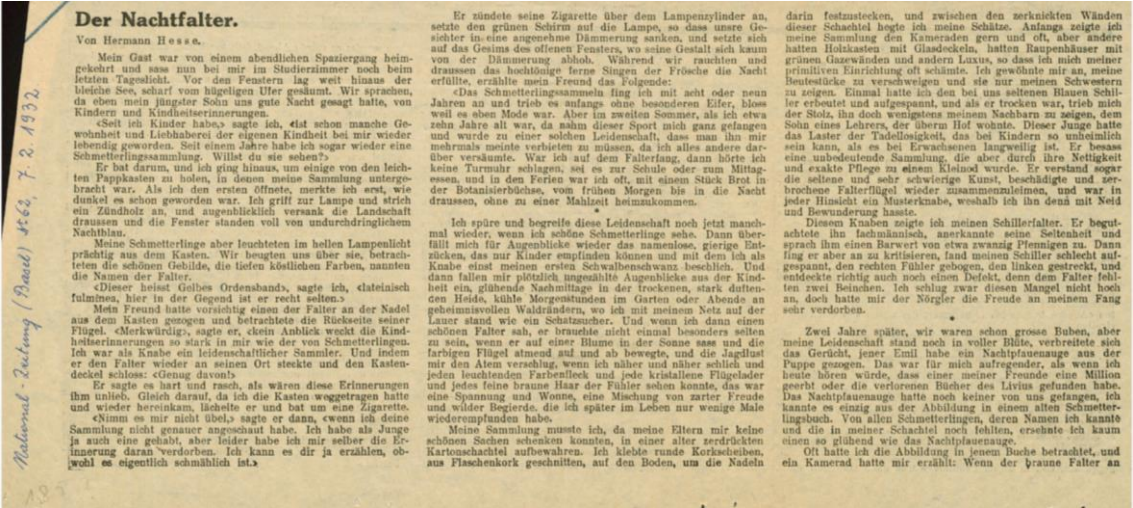
Das Nachtpfauenauge 1913年10月



Das Nachtpfauenauge 1927年4月



Der Schmetterling 1929 年 5 月



Der Nachtfalter 1932 年 2 月

発掘したものの中には、当該 2 作品とは異なるタイトルであったり、作品の一部のみの掲載にとどまっていたり、さまざまな形態のものが存在している。発掘調査が研究最終年度の秋(2023 年秋)であったことから、現在はそれぞれの詳細な比較検証の途上にあるが、原点 Das Nachtpfauenaue (1911)と『少年の日の思い出』の比較検証は、下記の論文で詳細に言及されている。これはまた、中学の国語教材としての『少年の日の思い出』にも従来ものとは異なる新たな解釈の可能性を見いだすための重要な前提である。

4. 研究成果

本研究の成果としては、下記の通り、論文 3 点と、講演 1 回、そして研究期間中に執筆は完了していたものの、修正等必要な手続きを経て、2024 年末に英国 Camden House 出版社より刊行されることが決定している著書（世界のヘッセ研究者との共著）がある。

論文（単著）

《Das Nachtpfauenaue》から《Jugendgedenken》へ ―改作の試みとその意味―

日本ヘルマン・ヘッセ友の会／研究会 Berichte 26 号 54-76 頁 2021 年 3 月

論文（単著）

『少年の日の思い出』 ―学習教材という視点からの理解―

日本ヘルマン・ヘッセ友の会／研究会 Berichte 27 号 2-15 頁 2022 年 3 月

論文（単著）

国立国会図書館の Hermann Hesse 関連資料と検索における問題点

日本ヘルマン・ヘッセ友の会／研究会 Berichte 28 号 2-13 頁 2023 年 3 月

講演（単独）

「作家・人間 ヘルマン・ヘッセ ―ナチズムに抗った精神―」

ホロコースト記念館特別講演会「ホロコーストの時代を生きたヘルマン・ヘッセ」

2023 年 9 月 30 日 ホロコースト記念館（広島県福山市）

著書（共著）

“Jugendgedenken”(Memories of Youth) : The Impact of a Hermann Hesse Short Story in Japan over 70 Years

Camden House（出版社）Hermann Hesse's Global Impact Part 1 Hesse's Literary Impact
2024 年末刊行

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本洋一	4. 巻 28号
2. 論文標題 国立国会図書館のHermann Hesse関連資料と検索における問題点	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本ヘルマン・ヘッセ友の会 / 研究会 Berichte	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本洋一	4. 巻 27号
2. 論文標題 『少年の日の思い出』－学習教材という視点からの理解－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本ヘルマン・ヘッセ友の会 / 研究会 Berichte	6. 最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本洋一	4. 巻 26号
2. 論文標題 《Das Nachtpfauenauge》から《Jugendgedenken》へ - 改作の試みとその意味 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本ヘルマンヘッセ友の会 / 研究会 Berichte	6. 最初と最後の頁 54-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------